

テーマ 「貧困家庭の子どもと親の支援 - 愛着を軸に考える -」
武庫川女子大学 倉石哲也 さん

人権保育専門講座5は、「貧困家庭の子どもと親の支援 - 愛着を軸に考える-」をテーマに、武庫川女子大学の倉石哲也さんにご講演をいただきました。県尾鷲庁舎、県鈴鹿庁舎、名張市役所の3会場で、計80名の方に参加していただきました。どの園・所でも喫緊の課題となっている「子どもの貧困」にかかわって、貧困が家庭にもたらす影響や、子ども・保護者への支援について、具体的な手立てを含めて学ぶ機会となりました。



◆貧困は家庭にどのような影響をもたらすのか?◆

貧困は、世代間連鎖しやすい傾向にあります。三重県では、詳しいデータは無いようですが、大阪では貧困の3世代目、4世代目という家庭が出てきています。両親が様々な疾患を抱えておられて働いていないため、その家庭に育った子どもも同じ道を歩むということがあります。貧困の家庭は、昼間の仕事が終わってから夜の仕事にも出かけていく、といった「かけ持ち就労」の家庭が多くあります。なかには、精神科疾患の方もおられます。そういった家庭の方に、保育園がどんな支援ができるのかをこれからお話ししていきたいと思えます。

子育てに不安があると、ストレスホルモンが増加します。ストレスホルモンの増加によって、心身のバランスを崩してしまう親がいます。そのことが生活リズムの乱れにつながってしまうのです。このような家庭にとって、「ちゃんと朝早く起きて子どもを保育園に連れていく」といった生活リズムの定着は困難です。また、貧困状態の家庭は、しんどさを隠していることがあり、地域から孤立していくこともたくさんあります。貧困家庭は、SOSを出さないことが多いのです。

貧困は、子どもの育ちに様々な影響をもたらします。「低身長・低体重」「発達の遅れ」といった体の成長への影響だけでなく、精神的にも影響をもたらします。「精神的貧困」という言葉がありますが、貧困家庭に育つ子どもたちは生活範囲が狭くなったり、適切な情報が得られなかったりして、自分の将来像が描きにくくなります。そのことが自尊心の低下をもたらし、低学力につながっていきます。「精神的貧困」に陥ると、社会的規範を守る意識が低くなっていく傾向も顕れてきます。貧困状態にある家庭では、子どもに持ち物忘れが増えたり、時間を守れなかったりすることが多いのはそのためです。

これらの人たちに共通しているのは、なかなか人に頼る力が乏しいということです。自分が困っ

たときに人に頼れないため、薬物やアルコールに依存してしまう傾向が出てきます。「困ったときにモノではなく、人に頼る」ということは、子育て期において、親にとっても子どもにとっても非常に大事な要素です。

精神的な貧困になると、集団のなかでうまくやり取りができずに逸脱してしまったり、衝動性が強くなったり、現実的にものごとを考えることが苦手になったりします。情緒的表現が乏しくなることも特徴の一つです。子どもに対して「もっと、こうしたほうがいいよ」と諭すのではなく、「コラッ」と短言語で注意することが多いということが調査結果からもわかってきています。どうしても、言語的な表現が乏しくなってしまうそうです。

◆保育所・園が、貧困家庭にできること？◆

では、保育所は貧困家庭に何ができるのでしょうか？私は、親ができないことを教育や保育で責任をもっていくことが必要になると思います。子どもの脳の8割は、3歳までに育つと言われていて、子どもの情緒性は、大体6歳ぐらいまでに完成すると言われていています。つまり、就学前までが非常に大切であるということです。このことと貧困家庭の状況を合わせて考えると、「家庭がもっとがんばれ」ではなく、「家でできないことは、保育所・園で責任をもちます」と考えることが重要になってくると思います。保育環境は、今激変しており、保育士の方々が大変であることは承知しています。しかし、保育や教育が上手くいかないことを、子どもや家庭の責任に転嫁することはやめようということです。

◆保護者支援の要◆

《家族のヒストリーを辿る》

保育所・園は、子どもとともに「親の育ちを保障する」機能を有しています。保育所・園が「親が親になっていく過程をどう支えていくか」ということが、非常に重要な要素なのです。このことは、きっと保育士のみならずもよくご存じだと思います。先生方自身が、保護者の方々が困ったときに相談できる対象となり得ているかどうかは大変重要です。「保育所で抱っこされると子どもが家で甘えて困るから、やめてほしい。ウチでは、抱っこしてないから」と言う保護者がいるそうです。こんなとき、保護者の子育てを単純に批判するのではなく、「この保護者は、どんな子育てを受けて育ったのだろう？」というふうに、保護者の育ちに想像力を働かせることも必要でしょう。保育士にとって、家族のヒストリーを探り、辿っていくスキルは重要です。子どもの名前の由来を聞いたり、妊娠がわかったときや出産時のことを会話のなかで聞いたりしながら、親の歴史をさかのぼっていくのです。もちろん、こんな会話をするためには、保育士と保護者の信頼関係が欠かせません。



《長所を探す＝ストレングスの視点》

また、家庭や保護者の長所を発見する力も大切です。長所を探すことを、ストレングス(Strength)

の視点とも言います。経済的にも精神的にも上手くいっている家庭の長所を見つけることは、それほど難しいことではありません。また、そういった家庭は、大抵保育士との関係も上手くいきやすいですから、長所も見つけやすいものです。逆に、貧困家庭など、上手くいっていない家庭の強みや長所を発見していくことは難しいことかも知れませんが、とても重要なことです。そのためには、否定的にとらえがちなことを肯定的にとらえ直すこと、つまり認識を変えることが必要になります。「コップに水が半分しか入っていない」ととらえるのか、「コップに水が半分も入っている」ととらえるのかの違いと似ていますね。「半分しか」ではなく、「半分も」というように、肯定的にとらえていくことが大切なのです。9時が登園時刻の場合に、11時に子どもを連れてきた保護者がいたとします。そのときに、「登園時刻に何時間も遅れている」ととらえるのではなく、「ちゃんと保育園に連れてくることができた」と受けとめることで、肯定的にその保護者を受け入れていることとなります。貧困家庭など、厳しい背景をもつ保護者を支援するうえで、自分たちがもっている期待値を、家庭や保護者の状況と照らし合わせて折り合いをつけていくことが必要なのです。「レジリエンス」という心理学用語があります。適応力とか回復力という意味で使われる言葉ですが、「しのぐ」「あがく」という意味もあります。大変な生活状況のなか「何とかしのいでいる」「あがいている」保護者の行動を、私たちの一方的な価値観で、良い・悪いと判断してはいけません。

《ゲートキーパーとキーパーソン》

「ゲートキーパー」と「キーパーソン」という言葉があります。「ゲートキーパー」とは、家族の情報を話す人のことです。親に限らず、登園のときに子どもを送ってくるおばあちゃんであるとか、年上のきょうだいの場合もあります。とにかく、先生方に家のことを話してくれる人が「ゲートキーパー」です。しかしながら、各家庭において「ゲートキーパー」と「キーパーソン」が異なる場合があります。「キーパーソン」とは、家庭のなかで意思決定をする人のことです。例えば、子どものことで何か気になることがあって、母親に相談して、発達支援の先生を紹介したとします。母親は



非常に乗り気だったのに、なかなか発達支援の先生に相談に行こうとしない。あれっと思い、改めて母親に話してみると「実は主人が・・・」ということがよくあります。こうなると、母親、つまりこの場合の「ゲートキーパー」と大切なことを話し合い意思決定しても物事は進みません。もし、この場合の父親のように、「キーパーソン」が別にいるのであれば、「父親（キーパーソン）をどうやって説得するのか」について、母親（ゲートキーパー）と相談する必要性が生じます。特に養育に困難を抱えている家庭では、キーパーソンが様々なところで登場するので、気をつけなければなりません。

◆ “育てられ方” と “育て方” の両面との向き合い ◆

子育ては、親自身が思春期や前期成人期にどのような親子関係を築いてきたかということによって、とても影響を受けます。思春期や前期成人期に重要なことは、2つあります。1つめは、親と離れるということです。ただ親と離れるには、上手にできないといけません。親の立場からすると、子

子どもが自分のイメージと違うおとなになっていったときに、「まあ、それもいいか」と子どもを信じて任せられるかどうか重要です。子どもにとっても、親から安心して離れられないと次のステージに進めません。このように、上手に親と子どもが離れるためには、それまでの親子関係がきちんと築けていなければなりません。2つめは、親と離れたときに、親以外のおとなに頼れるかということです。親以外のおとなとは、例えば、恩師や困ったときに助言をしてくれたおとなです。今、この2つが上手くできないままおとなになった親が増えていると言われています。

子育てにおいて、母親は自分のアタッチメント対象（頼れる存在）を探します。頼る相手として一般的な人は、自分の親、夫、仲間、専門家などが挙げられるでしょう。しかし、頼れない親が非常に増えています。理由は、たくさんあります。自分の親に頼ろうと思っても、働いている祖父母世代も多いので忙しく、頼ることができないというケースが増えています。「孫の面倒をいくらでもみるよ」という祖父母世代は減ってきているのが現状です。では、「仲間」はどうでしょう。最近は、子育てが終わると引っ越してしまう家庭があったり、新興住宅地であったりして地域のつながりが薄くなっています。そのような状況から、「仲間」がいない親が増えています。つまり、「子育てでつながれる人」は先生方しかないのです。

◆愛着（アタッチメント）◆

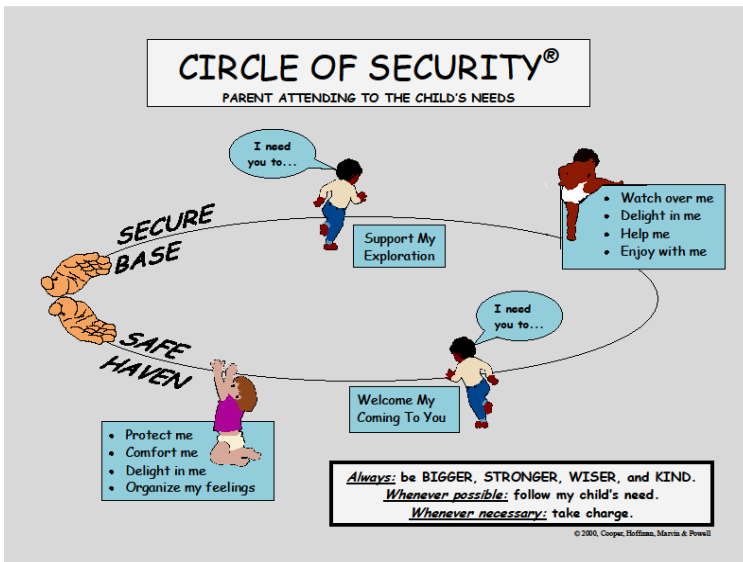
「愛着」とは、アタッチメント（attachment＝くっつく） という意味の言葉です。ジョン・ボウルビィという精神科医が1960年代に「愛着」を次のように定義しました。広い意味では、「子どもと養育者の間で交わされる情緒的交流」をさします。狭い意味では、「子どもが不安を感じたり、危機的だと感じたりする状況で、特定の養育者との間で情緒的な安定を取り戻そうとする行為」をさします。「不安を感じたり、危機的だと感じたりする状況」とは、簡単に言えば「泣いている状況」です。「特定の養育者」とは、親や保育士など、ある程度日常的に養育にかかわっている人になります。つまり、子どもが泣いている状態のときに、養育者との間で落ち着くことができる体験を「愛着」と呼んでいるのです。

愛着を正しく理解するためのポイントをいくつか挙げておきます。

- ①愛着は母親との間だけで成り立つのではない。
- ②母性神話を助長するものではない。
- ③子どもの「養育者」は複数（多数）存在する。
- ④養育者が頻繁に交代しないことが重要（一貫性と持続性）
- ⑤生涯にわたる自分・他者・社会への信頼体系（内的ワーキングモデル）の形成に影響を与える。
- ⑥愛着不全は、愛着障害や人格障害にいたる危険性がある。

まず、確認しておきたいことは、③「養育者」は複数存在していて良いということです。母親に限らず、父親、他の家族、親戚の人も「養育者」です。そして、先生方も「養育者」です。また、それぞれの「養育者」の愛着のスタイル（子育てのやり方）を一致させる必要はありません。ここで言う④の「養育者は頻繁に交代しない方が良い」というのは離婚や再婚などによって親が急にいなくなるような状況をさしています。

次は、⑤の自分・他者・社会への信頼体系の形成についてです。赤ちゃんは、泣いて、抱っこしてもらって落ち着くという経験を繰り返すことで、「泣いたら助けてくれるおとながいる」と感じます。その際、大切なことは、おとなが「この子が泣いているのは、おむつかかな?」「おしっこなのかな?」「おなかが減っているのかな?」「眠いのかな?」と感受性を働かせて察知することです。泣いて、おとなにかかわってもらって落ち着くことを繰り返すことで、子どもは他者への信頼を得ることができます。そして、「自分は助けてもらえる存在なんだ」と認識し、自尊感情を獲得していきます。さらには、「自分の周囲にいる人は、自分のことを守ってくれる」と感じられるようになります。保育所に入りたての0歳の子どもは、何かあったらすぐに泣きます。でも、数週間も経てば、泣かなくなり落ち着いた姿を見せるようになっていきます。なぜかという、「保育所で自分の周りにおとなは、自分のことを守ってくれている」ということがわかるようになるからです。しかし、この信頼体系は、一度他人から傷つけられる体験をすると崩れてしまいます。いわゆるトラウマを経験すると、信頼体系は崩れ、「怯える」「攻撃的になる」といった姿を見せるようになってしまうのです。



ボウルビーは、信頼体系が獲得されるためには1歳までが重要であると言っています。ただ、21世紀に入ってから、6歳までは修正が可能であるという研究報告も出されています。

「circle of security」と呼ばれる図を紹介し、「security」とは、安心とか安全という意味で、「circle of security」とは、「愛着」を意味します。

左側の手は、養育者の手、つまり子どもにとっての安心・安全の基地を表しています。この図は、右回りに子どもが養育者の

手を離れ冒険に出かけ、また養育者の手に戻っていく様子が描かれています。離れていっている子どもの背中には、「ぼくのこと見ておいてね」とか、「ぼくのこと見てくれてるよね?」「助けてくれるよね」というメッセージが書かれています。実際には、このようにいちいち言葉には出さないけれど、「養育者は見てくれている」という安心感があるから、この絵の子どもは冒険できているのです。実際の場面でも、小さな子どもがソファーによじのぼって、「お母さん見てくれてる?」とでも言うように、養育者の方をふり返ったりすることがありますよね。上手くできると、養育者と一緒に喜び、上手くできないと泣いて養育者を呼ぶでしょう。左下の絵は、抱っこを求めるポーズです。ここには、「気持ちよくさせて」、「気持ちを落ち着かせて」というメッセージが書かれています。子どもが抱っこをせがむ理由は、気持ちを落ち着かせたいからですよね。

この図を簡単にまとめれば、「子どもは安心できる場所があるから冒険ができる」ということになります。子どもが大きくなると、「養育者(保護者、先生)は、どこかにいて見てくれているだろう」と頭のなかでイメージして行動できるようになります。もちろん、嫌なことや助けてほしいことがあったら、「先生、こんなことあった」と助けを求められるようにもなります。

これらは、「自立」を考えるうえでも重要になります。私は、自立を2つの視点で考えています。

1つは、「自分で自分のことができるようになること」です。もう1つは、「できないときに、頼れること」です。2つめの自立が果たせるようになるためには、子どもができないことを頼ってきたとき、養育者がどのように手を貸すかが非常に大事になってきます。最近、1つめの「自立」を急ぎすぎている保護者の方がとても多いことに懸念を抱いています。

また、子どもは、養育者との間で様々な愛着行動を示します。養育者といっても、保護者の人に示す愛着行動と先生に示す愛着行動が異なる場合があることを知っておく必要があるでしょう。

◆愛着行動の特徴について◆

子どもの愛着行動について、「プレイルームを使用しての実験」を紹介します。1歳から2歳ぐらいの子どもが、プレイルームに入ってお母さんと2人で遊びます。しばらく経ったあとにお母さんが部屋から出て行ったとき（分離）の子どもの様子を観察します。また、お母さんが部屋に戻ってきたとき（再会）の様子も観察します。この分離と再会の2つの場面の様子から、子どもの愛着行動を観察していく実験です。

この実験を行ったエインスワースは、実験から見てくる子どもの様子を4つに分類しました。

D型については、虐待やネグレクトなど養育環境に問題があると考えられています。ここで示した割合については地域差があり、私がかかわっている保育所ではD型の割合がもっと高くなっています。D型は、いわゆる「愛着障害」と呼ばれる子どもの様子になります。「愛着障害」の子どもは、先生との関係も悪くなること

があります。「愛着障害」の正式名称は、「反応性愛着障害」と言います。「愛着障害」の子どもに表れる乳児期の症状としては、「笑わない」「部屋にいる人を目で追いかけない」「抱き上げられるときに手を差し出さない」などがあります。年長児での症状としては、「他人を避ける」「謝ることができない」「支援や助けを求めない」「強い衝動性を示す」「協調性、リズム感が弱い」などがあります。

「愛着障害」の子どもたちに表れる症状は、自閉症スペクトラムの子どもたちやADHDの子どもたちの症状と似ているところがあります。学齢期から思春期に入ると、眠りが浅かったり、自尊心が低下したりといった姿も表れてきます。とりわけ、自閉症スペクトラムやADHDの子どもたちと比べて特徴的なことは「悪への憧れ」を示すことで、人の嫌がることを言ったり、やったりしてしまいます。

◆子どもたちの愛着を回復するために◆

では、「愛着障害」の子どもたちにどのような支援をすれば良いのでしょうか。愛着関係を回復するためには、安心感と安全感を子どもに与えることが大切です。園・所が、子どもにとってほっとできる場所や楽しい場所になっていなければいけません。また、園・所のなかに子どもの安心できる場所があることも重要です。最近の園では、部屋の一角に寝そべることができるスペースをつくっ

子どものアタッチメント(愛着行動)
<Strange Situation Procedure (SSP) : Ainsworth> プレイルームを使用しての実験
①A型(回避型) ・ 養育者との分離で混乱を示さない。養育者と距離を置く
②B型(安定型) ・ 分離時に混乱するが、再会時に静穏化(情緒安定)
③C型(不安定・囚われ型) ・ 分離に激しい苦痛を示す。再会以後もネガティブ感情を長く引きずり、養育者への強い怒りや抵抗を示す
④D型(無秩序・無組織型) ・ パターン化の①～③に比べ、無秩序。近接と回避を繰り返す。顔をそむけて接近する。うつろな表情を示す等、①+③+④型

ている場合があります。子どもが、自分にとって安心できる居場所を見つけられているかどうか、愛着を回復するために必要なのです。

それから、愛着対象としての保育者が園・所のなかにもいることも重要です。誰が自分の愛着対象であるかは、子どもが選びます。それが担任の先生であるとは限りません。1歳半までの親との関係ができている子どもは、大抵の場合、担任の先生を「この人が自分を守ってくれる存在なんだ」「この人は信頼できる人なんだ」と認識します。少しぐらい波長が合わないと感じて、合わすことができます。しかし、「愛着障害」の子どもは、人を信頼できないので、自分のイメージに合う他の支援者を探



すことがあります。担任の先生からすると、「どうして担任の私のところへ来ないの?」と思いがちですが、そのことであまり意固地になって無理に関係をつくろうとすると、かえって子どもの情緒は乱れてしまい、その子にとって良いことはありません。それよりも、養育に困難を抱えている子どもにとって、担任や子どもが頼っている保育士以外にも、様々な人がかかわりをもつことが大切です。そうすることで、愛着が上手くいっていない子どもは「保育園の先生たちは、ぼくのことを大切に思ってくれているな」と感じ、信頼感をもつことができるようになっていきます。愛着に問題がない子は、担任の先生と信頼関係が築けると、「他の先生も自分のことを大事にしてくれるだろう」と漠然と感じることができ、愛着がうまくいっていない子は一人の先生と信頼関係を築いても、「他の人はどう思っているかわからない」と警戒してしまいます。このような子どもには、保育士が波長を合わせることが必要になります。例えば、子どもと一対一で笑い合える関係を築いていくことが必要です。ユーモアをもって子どもと接することは、愛着に問題がある子と関係を築くためにとても有効な手立てと言えます。ただ、人が嫌がることを言ったりやったりしながらコミュニケーションをとろうとする子どもに対して、ユーモアで返すことは、おとなでも人によっては難しいものです。ですから、すべての人がユーモアをもって接しなければならないわけではありません。少なくともユーモアを否定する職員集団であってはならないと思います。

愛着に問題がある子どもは、情緒が安定しません。情緒を安定させるためには、体を動かすことが有効です。脳のなかで感情をつかさどっている大脳辺縁系は、延髄から神経をとって体全体につながっています。両手両足を動かす運動をすると、神経を刺激し、大脳辺縁系が落ち着く効果を生みます。首筋や背中や腰を伸ばして姿勢をよくすることも、同じような効果があります。足の裏をぎゅっと踏みしめるだけでも、効果があります。養育環境に問題がある子どもは、情緒が不安定で大脳辺縁系が落ち着かないことから、かかとの踏みしめが弱くなっていることがよくあります。そのような子どもに、壁に両手をつけて、両足をぐっと踏みしめる運動をさせると大脳辺縁系を刺激して、情緒を落ち着かせる効果があります。2人組で向かい合って、両手を合わせて力比べ遊びをするのも効果的でしょう。2人で押し合うことで、協調性を養うこともできます。トランポリン、けん玉、ダンス、太鼓を叩くことなども、大脳辺縁系を落ち着かせる効果があるとされています。このように、園・所で、日常的に愛着を回復させるためにできることはたくさんあるのです。

◆**養育者の愛着スタイルと子どもの愛着行動の関係性**◆

子どもの愛着を回復させるためには、親の愛着スタイルを看取っておく必要があります。養育者の愛着スタイルは、4つに分類することができ、それぞれ①安定型、②愛着軽視型、③不安定・囚われ型、④未解決型と呼ばれます。

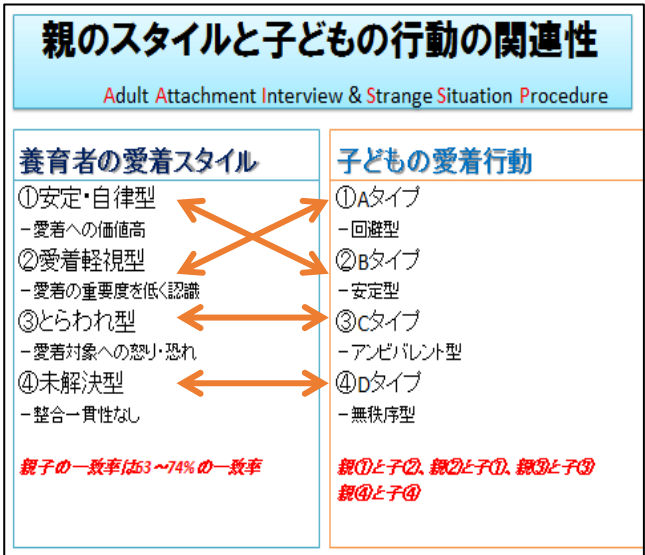
<p>養育者の愛着スタイルの分類 1 = 観察(■)と被養育体験(□)の振り返りから =</p> <p>①安定型</p> <ul style="list-style-type: none"> ■親の子どもへの感受性や応答性は日常的に高い ■子どもの不安や怒りの読み取りができ、子どもとの間で落ち着いたやりとりがある ■養育行動にある程度の一貫性がある <p><input type="checkbox"/>愛着の重要性を高く認識している</p> <p><input type="checkbox"/>保育者や仲間等にも被養育体験をプラスとマイナスで思い出し、語る事ができる</p> <p><input type="checkbox"/>周囲の人間に信頼関係を築くことに困難を感じない</p>	<p>養育者の愛着スタイルの分類 2 = 観察(■)と被養育体験(□)の振り返りから =</p> <p>②愛着軽視型</p> <ul style="list-style-type: none"> ■子どもや保育者に対して全般的に拒絶的 ■子のマイナス感情や身体接触を好まない ■子どもの育ちに関心が高くない <p><input type="checkbox"/>愛着を語るが自分の体験的な根拠は弱い</p> <p><input type="checkbox"/>自らの親との体験は語りたがらない</p> <p><input type="checkbox"/>周囲の人間に信頼関係を築くことをしない</p>
<p>養育者の愛着スタイルの分類 3 = 観察(■)と被養育体験(□)の振り返りから =</p> <p>③不安定・囚われ型</p> <ul style="list-style-type: none"> ■親の子どもへの関わりが自己都合が多い ■不安が強く、落ち着かないやり取りが多い ■子育ての情報が過多で、不安定さが見られる <p><input type="checkbox"/>自らの愛着について、思い出や言葉の整合性が弱い</p> <p><input type="checkbox"/>親への怒りや不安を強く出すような表現もある</p> <p><input type="checkbox"/>周囲の人間と安定した人間関係が作りづらい</p>	<p>養育者の愛着スタイルの分類 4 = 観察(■)と被養育体験(□)の振り返りから =</p> <p>④未解決型</p> <ul style="list-style-type: none"> ■親は子の行動に過敏であったり、抑うつ的と波がある ■精神的不安定さを抱えている ■現在(過去)に困難体験を抱えており、そのことを語る <p><input type="checkbox"/>家族に外傷体験(親との分離、喪失体験、トラウマ曝露)を抱えている</p> <p><input type="checkbox"/>親への語りは弱い</p> <p><input type="checkbox"/>周囲の人間との関係は限定的で孤立的</p>

養育者の愛着スタイルと子どもの愛着行動の関係性をまとめると次のようになります。

先生方はほとんどの場合、安定型のため、子どもは園・所では安定型になります。しかし、家に戻ると保護者の愛着スタイルによって変わってきます。

忘れてはならないのは、養育者の愛着スタイルは、背景に体験や被養育経験があるということです。④の未解決型の親の場合、親自身に被虐待経験などがなくても、たとえば結婚早期に胎児をなくしたり、災害を身近に体験したり、幼いわが子と別れざるをえなかったり、夫から深刻なDVを

うけたりして、心的外傷をこうむっていることが要因で精神的不安定になっていることがあります。このような心的外傷について、サポートを受けられず、その体験を誰にも語ることもないまま心の奥底に押し込み未解決であった場合には、怯えさせるような行動をとってしまい、その結果、養育場面で子どもと子どもを不安定な状況に陥らせてしまうことがあります。



◆愛着の回復を目的とした対応について◆

では、愛着軽視型、とらわれ型、未解決型の親にはどのようにかかるとよいのか考えてみましょう。

①親のタイプを変えようとしな

まず、念頭に置いておくべきことは、子どもに冷たい親の愛着スタイルは変わらないということです。自分の親と体験してこなかったことは、わが子に対してもできないのです。そのため、保育者が見本を示すことが大切になってきます。

②子どもの愛着行動を変える

そして、親と保育者の愛着行動を一致させることを焦らないようにしましょう。子どもの保育者への愛着行動を親に見せ、親が自発的に気づいたり質問してきたりするのを待つことが大切です。その際には保育者も保育や子育てにおいて苦労していることなどを伝え、親の悩みや不安を共感的に受けとめながら接することが必要になります。

③保育者の愛着行動の理解を得る

また、家庭での親の愛着行動を肯定的に認めつつ、園・所の愛着を回復する取組をきちんと説明することが大切です。保育は子どもをケアし、集団の中で子どもの育ちを保障するものなので、例えば泣いたら抱っこするなど、子どもが安心して楽しくできるようにかかわるのだということをはっきり親に伝えていく必要があります。

④親の愛着スタイル別に対応する

親の愛着スタイルに合わせて、親への接し方を工夫することも重要です。

<愛着軽視型>

子どものことよりも自分自身への意識が強い傾向にあるので、まずは仕事の忙しさなど親自身の話を聞いて、不安などを受けとめることから始める必要があります。

<とらわれ型>

子どもの行動に過敏になっているので、子どもの心情を保育士と一緒に考える時間をとることや、場合によっては子どもの心情を保育士が代弁する必要があります。

<未解決型>

他者への不信と不安が強いため、まずは親にとって安心できる環境が必要です。そのため、園・所を親の安全基地にする取組が重要です。例えば、全職員が気になる親に毎日声をかけるようにするなど、“みんなが見守っていますよ”というメッセージを送ります。自尊感情を高めるために、感謝されたり認められたりする経験も重要です。

保育士が親へのかかわりを工夫することで、親が保育士との関係に安心でき、その結果、親と子どもの関係の変化へとつながっていくのです。



参加者のアンケートより

- 貧困だけでなく、子どもの発達や保護者へのアプローチの仕方丁寧にお話しいただき、大変参考になった。
- 愛着障害や自閉症スペクトラムの実態、それに対する対応の仕方などを具体的にわかりやすくお話しいただき、非常に参考になった。子どもがどういう困難さを背景にしているか、どういう貧困になっているかを確認しながら、今後の対応にいかしていきたい。
- 貧困など、複雑な家庭環境をもつ子に対して、教師は何ができるか、改めて考える機会をもつことができた。家庭に深く踏み込んでいく部分については児相などの諸機関とも連携しようと思う。「子どもが学校に来て、楽しく過ごすことができる」ように、これからも学級づくりにがんばっていこうと思った。
- 先生のお話のなかで出てくる子どもや保護者が「あ、あの人だなあ」とイメージできた。身近な問題だからこそ、切実だなと思った。具体的な声かけや対応をたくさん教えていただいたので、大変わかりやすかった。明日からの実践にぜひいかしていきたいと思う。
- 子どもの不安を考え、すぐ親から様子を聞きだそうと焦ることもあったが、今日話を聞いて、まず親から話すのを待ってみたりしながら、親の不安も受けとめていきたい。そして子育てをともにできるよう、信頼関係を築いていきたいと思う。より丁寧なかかわりを考えていきたい。
- 講義の間、ずっと2～3人の保護者の姿がうかんでいた。そして、その保護者に対し、肯定的な見方をしていなかったと自分を反省した。
- 子どもと親への支援ということで、たくさんお話を聞かせていただいた。保護者対応の参考にさせていただきたい。
- 大脳とのつながり、保護者対応についてなど、細やかでわかりやすい講座だった。園全体に聞かせてもらったことを環流し、愛着関係について学びなおしていきたいと思った。
- 具体的な対応を教えていただけたので、実践するイメージがわいた。今まで経験したなかで同じようなことがあったので、ふりかえりながら聞かせていただきよかった。